
難解恋愛方程式

伊吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

難解恋愛方程式

【Nコード】

N9812V

【作者名】

伊吹

【あらすじ】

失恋して呆然自失のところに現れた男はどこか引つかかるものがあった。誰だっけ？と記憶を探る。前『恋の到来』改題しました。2-3話をちまちま連載していきます。

恋の到来 1

「おやまあ、そこにいるのは赤星くんでないの」

赤星とはあたしの名前だ。

まだ明るい昼間から、何の目的もなく公園のベンチに座り込み俯くあたしの耳に届いた。膝の上におかれた両掌、右手だけ赤いのを隠すように裏返して、顔を上げた。隠さずとも右手だけが赤い理由などわかりはしないだろうが。

顔を上げてあたしを呼んだであろう人を見た。調子がいい浮かれたような声に聞き覚えはない。

スーツを着てサラリーマンだろう。人のことなど言えないが、こんな昼間から公園に足を踏み入れるなんてさばりに違いない。

「あれ、泣いちゃって。せつかくの別嬪さんが勿体ないねえ。ああでも宮部さん女性に貸せるハンカチーフを持っていないのですよ、生憎宮部さんのハンカチーフをもらいたいという……」
女性が多くて困ってるのですよ、これがまた。

ぺらぺら話す男の顔をじつと見つめる。一を言えば十が返ってくるようなうるさい男は記憶のどこかに引つかかる。名前は宮部といった。……誰だっけ、とじつと目の前にお調子者を見つめ続けて数秒、記憶の奥底、埃をかぶっていた存在を見つけ出した。

「宮部丈二、」

「はいはい、お呼びなすつて。宮部丈二ですよ。赤星歌織くん。泣きたいのなら胸を貸してあげますよ、あーあー宮部さんの胸は高いですよ、女の子に自慢したらブーイング来ちゃうくらいに」

「はあ？ばっかじゃないの」

浮かび上がってきた存在が目の前にいる。あの頃と全く変わりのしないその態度に呆れた。

ベンチ横に置いたままだった小ぶりのバックを振り上げる。両手を広げて、どうぞ胸に飛び込んできなさい、とでも言いたげな表情の宮部丈二を追い払う。

この男の表情を読み取れようになってしまったほど仲が良かったことを思い出して眉を寄せる。いや、単純な男であり、表情を読み取るくらい簡単にできてしまったのだけだ。

「赤星くん、人に暴力振るうなと教わったでしょ、教わらなかった？ いやいや教わったはずですよ。ねえ、あーあー、ほかあ、赤星くんがそんな子に育ってしまったことが悲しくて悲しくて。涙が出ちゃう、オヨヨ」

「はあ、もうその軽々しさ、本当やめて」

「いやいや、歌織ちゃん。世間はボクを真面目な宮部くんで見ているですよ。もういつでも100%で全力投球ですよ」

ああ、もう。

こいつを見ると泣いてる自分がばかみたいた。

今思えばあんな男に執着していた自分がばかみたいじゃないか。

いつでもお気楽、人の落ち込みでされ茶化され、しょうがないかと思わせてしまう宮部の振る舞いにあたしもじんと痛む右手をぎゅっと握りしめた。

「ありがとう、」

声に出すと、握りこぶしをつくった右手も力が抜ける。

別に宮部がなにかしたわけじゃない。

けれど今、このタイミングで現れたことに感謝したいから。
お礼の言葉はなんだか照れてしまう。それでもぼつりと呟いた。

「いやーねえ。赤星くんになんかと言われちゃったら明日は大雪
かしら、そうかしら。だからといってえーと、あー」

じっと宮部の顔を見てたら、奴は目を泳がせておろおろします。
ん、って違和感を覚えて気付く。

「宮部、もしかして照れてんの？」

「……」

くるりと背を向けて歩き出した宮部を見て凶星を突いたのだと気付く。

宮部ってば照れることもあるのね。
学生時代では見ることでできなかった一面を知って笑う。

「僕は帰ります、お仕事がありますので。赤星くんも早く帰りなさい。
もうおじさんをからかわないよーに」

声は微かにしか聞こえなかったけれど、照れが混じった声音だった
のはわかった。

もう会うことはないだろうけど。

「ありがとう、宮部」

小さく口の中で転がしてあたしも涙を拭って歩き出した。
宮部とは反対方向に。

だってそれが格好いいじゃない。

何歩か歩いてあたしはふと振り返る。
奴もちょうど振り返っていて目が合う。

ちょうど図ったみたいに。

へらりと奴は笑っていた。

あたしも釣られて力が抜けた。

失恋しちゃった日とは思えなかった。

恋の到来2

なんて素晴らしきクリスマス。

エコ、と世間で言われているように会社でも定時過ぎると蛍光灯の明りが半減されて、薄暗いオフィス。

ホワイトクリスマスがなんだ。

あたしは一人薄暗いオフィスでパソコンに向かっている。

あたしの予定では、今夜は定時に上がって、帰ったらのんびりと2時間程度半身浴して汗をかく予定だった。それが、なんだ。

暖房も切られた寒くて薄暗いオフィスに一人。

クリスマスなんてくそくらえ。

典型的な彼氏がいない女のクリスマスみたいで、ホントいやだ。だからこそ、のんびりしたかったというのに。

21時になんとか終わらせて、鍵を閉めると職員口に居た守衛さんに彼氏が泣くよ、とからかわれた。

彼氏なんていません。

振られたばかりです。

心の中で反論しながらにつこりと笑った。

付き合っていた頃、よくこの職員口のそばの花壇に浅く腰掛けて、彼が待っていた。

それを知ってる守衛さんだからこそその言葉だろうけど。でも、不思

議とそれほど落ち込んでいない。なぜ、と言わずとも思い当たる節がある。

宮部丈二。

高校のときから変わらない、あの濃いキャラクターで、彼はあたしを からかった。

そう、からかったに違いない。

あれを慰めるとは言わない。絶対。

あれから泣くことも、失恋したと落ち込むこともなかったのは事実だけれど。慰められたとは思わない。 思いたくない。

「イルミネーションが眩しいわ」

クリスマスの夜に、煌々と輝くイルミネーションは残業でやつれた仕事女の目には眩しすぎる。

恋人がいればこのイルミネーションもまた、きれいでロマンチックなんだろうけど。今のあたしには、煩わしさしか感じない。

恋人 二股掛けられ、その上あたしが浮気相手だったという最低男。本当に、思い返せば最低な一面しかなかったと思う。何故に、あんな男に夢中だったのか。あの頃の自分がわからない。

足早に、電灯に装飾された並木道を通る。寄り添う恋人達が羨ましい、とは言わないけれど、寂しいと思う。二股男を恋しく思うわけでないけれど、クリスマスを一緒に過ごそうと約束しただけあって、現実を思い返すと寂しくなる。

幸せそうな笑顔を見て、自分もああであったはずと違ってしまふ。一瞬でも想像した相手が奴だったことに、あたしはびっくりした。そんなこと思ってもいないのに。

「弱ってんのかな、あたし」

「ぼかあ、そんなことないと思いますけどねえ」

自嘲気味に零した声に応えがあつて、驚いた。

「宮部」

「はいはい、赤星くん。宮部くんですよ。最近よく会いますねえ」

振り返ればへらりとおちゃらけた顔がそこにある。高校のとき、再会した数日前と全く変わらない。

「クリスマスに再会なんて、これはもう運命でしょ、いやいや。この僕と運命なんてよかったですねえ、女の子から……」

言葉を、返せない。

宮部が、「冗談で零した言葉があたしの心のだ真ん中に突き刺さったから。」

冗談！

自分で思ったことにショックを受けるなんてばっかじゃないの。

そう、宮部にとっては冗談だ。あたしと運命なんて、「冗談で口にしていただけなのだ。」

それをあたしも思った、と勝手に動悸がして、そして自分の言葉に落とされる。

ばっかじゃないの。

人恋しいクリスマスだから、こんなに弱ってるに違いない。でなければ、俯いて足元が滲むわけがない。視界がぼやけるわけがない。

「歌織くん、どーしたの？あれま。泣いてるの？ほらほら、またボクの胸に、」

「ばっかじゃないの！」

宮部の言葉を遮ってバックを振り回して、宮部を置いて走り出す。最後に見たのは、手であたしの振り回したバックから身を護って、突然の出来事に目を瞞った顔。そのおちゃらけた言葉があたしに期待を持たせて、そして突き落とすのだ。

頬が濡れる。

冷気に触れて冷たくなる。

けれど、これは雪。

クリスマスにふさわしく、雪が降り積もっていく。

走るあたしの頬に舞い降りて、濡らしていく。

クリスマスって言葉に惑わされてる、人恋しくなる魔法が掛かっているに違いない。

クリスマスに再会。

簡単に、恋に落ちてしまっくらいに。

恋の到来3

クリスマスマジックに陥っちゃってから、はや1週間。年末ですけど、マジックから抜け出せそうにもない。

除夜の鐘が目の前で突かれています。煩惱を取り払ってくれ、と念じるけれど、頭の中はあいつの顔が占めていてどんと居座って腰が重たく、動く気配がない。

なんつーことだ。

あいつの軽さはこういうところで発揮しなくてどこで発揮するんだ。出てけえ、といくら念じてもどうしようもない。煩惱なんて払えないじゃんか。

どこかでカウントダウンをする張り上げた声が聞こえた。

誰か言いはじめたことで、それが伝染したんだろう。

声が聞こえる、321と最後までカウントダウンが終わったら耳がつんざけんほどの爆音が境内に響き渡る。

耳を塞ぎたくなる。なんて煩いんだ。おめでとう、と所々で叫ばれている。

こっちはおめでとうつー気持ちじゃないっての。

あーちくしょう。

カップルが目についてたまないっ！

ささっと初詣を済まして家でふて寝してやる、と意気込んで足を動かす。

少し歩いたところに神社もあるし、と人の波に乗った。考えることは同じようで流れも神社に向かっている。

賽銭箱まで来て、握り締めた5円玉を投げ入れ2拝2拍手、願いを込める。

ちよつとばかしてもいいんで、あいつと………。

やっぱり煩惱は払われていなかったみたいだ。あたしとしたことが、あいつに捕われてる。

最後に1拝してあたしはくりと人の波に逆らうように、抜け出す。御神酒を飲んで、おみくじでも引いて帰ろうか。

柄にもなく恋愛運が気になるところ。一口御神酒を飲んで、財布を開く。

「うげっ、小銭ないしっ」

こういうときに限って、お札も大きいのしかないってのが定石だったりする。

諦めるか、と回れ右をしようとした。

「あれま、赤星くんじゃないの？こんなところで」

100円玉をぷらぷら、あたしの前に持ち出した。お軽い煩惱の根源が現れ、あたしの手のひらに硬貨を落とした。

タイミングが良すぎる奴にあたしをどうしたいんだ！ と苦悩しながらもおみくじを引いた。

恋愛：近くにあり、探す必要なし。

お前かあゝと襟を掴んで揺すりたくなる存在が近くに、というか隣に立ってるんですけど。

「近くにありですって。僕だったら、困るって。ねえ、世界の女の

子が泣いちゃうに違いなくてさあ」

困る、あたしにはそのフレーズしか耳に届かなかった。まだ、何か言い続けている宮部丈二をキッと睨み付けて、バッグを振り上げた。

「うつさいっ」

この人混みの中よく他の人間に当たらなかつたもんだ、とあとになつて思った。

宮部にバッグをぶつけ、人にぶつかりながらも走り抜ける。再会してから宮部にはバックを振り回してるな、と思ひ出す。それほどまでに神経を逆なでされてしまうのだけれど。

人混みを抜け、家へと向かう住宅街に入る。ぽつりぽつりと街灯が暗闇を照らし静かになつたところで、歩みを止めた。

そこで気付く。後ろから足音が聞こえる。振り返るよりもさきに抱きすくめられる。

「運動不足のサラリーマンに走らせるなんて赤星くんくらいしかいませんってえ、え？ 何泣いて？ あ？ あーあー……胸を貸してあげようじゃないの」

後ろから抱き着いて、くるりと反転させられた。顔も上げさせられて、隠しようがない。オロオロしだした宮部はコホンと咳ばらいをひとつだけして、後頭部に手をやって、あたしを引き寄せた。

クリスマスマジックに掛かったままのあたしは抗うつもりなんてない。こんなやつにオチちゃった悔しいと、それ以上に嬉しさがないまぜになつて涙が止まらない。

「ああ、もうっ！歌織ちゃん、勘弁して」

口調が変わった。

「泣き止んで、お願いだから」

ぼんぼんとリズムよく叩かれる背中から伝わる優しさ。急に恥ずかしくなつて、宮部の胸を押して、距離をとった。その口調はどうして、と思わず涙も引つ込んだ。宮部丈二の代名詞ともいえるお調子者の仮面がはがれている。というか、仮面だったのか？

「あれま？ 泣き止んだ？」

元に、戻っている。さっきまでの口調は、いったい？

疑問ばかりが先走る。けれど急に今の状況を思い出して、顔が火照るのがわかった。薄暗いなかでもこの近距離にいる宮部にはきつとわかってしまうに違いない。

恥ずかしさを押し隠すように名前を呼ぶ。どうして、と問い詰めるつもりだけれど、いまのいままで泣いていたあたしの声はか細くよわよわしい。

「みや、べ……？」

「歌織ちゃんってば寂しがり屋で泣き虫なんですわねえ。いやはや、赤星くんがどうしてもって言うならオジサンの胸は赤星くんだけのものでもいいですよ、いやいや。羨ましいわねえ、コノヤロウ」

早口でまくし立てる宮部の視線は定まらず、どこか慌ているようでもあつて。

この様子はどこかで見たとある。……照れて、いるのだろうか。

「宮部？」

「ああ！ もうバカヤロウ」

離れた一步の距離を詰めて、宮部は叫んだ。拒否する間もなく、引きづられて行くのは家とは逆方向。

悪態を吐く宮部に付いていけないまま、あれよあれよとコトが進む。理解する暇もなく、宮部に手を引かれる。後ろからかすかに見える宮部のほほは赤く染まっていたような。

一方的に握りしめられたその手を、あたしの意思を持って握り返す。しっかりとそれに気づいた宮部がさらに力を込める。

どうしよう、嬉しすぎる。

払いたいはずの煩惱に取り付かれたまま、もがけばもがくほど絡み付いていく、と気付くのはまだずっと先の話。

恋の到来3（後書き）

季節外れにもこの上ないお話ですいません。

お調子者の彼がとてもとてもすきで出したくなりました。

書き上げた当初の雰囲気は壊したくなくて、段落と各行間を整えて再掲載しています。

つたないお話ですけど、お読みいただきありがとうございました！

このあとは、ふたりのひみつ。

恋のその後 1

恋人ができてどこか浮ついたのを自覚しながらも、その感情をうまく隠すことができなくてそわそわするっつのは学生以来初めてかもしれない。その前が学生の時からならならと続いていたからか、久しぶりの感情を持て余しているようで、しっくりこない。

ところが最近、仕事に支障を出してしまいそうになるほどの想いに捕らわれているよう。それが恋に浮かれて、というたぐいのものであれば自分を引き締めることもできるのだけれど、そうもいかない。その元凶を問い詰めたくとも、できそうにない。

どうやらあたしは、宮部との連絡手段を持っていないようだった。

新年が開けて数日しか経たないというのに、街中には赤やらピンクやら、可愛いらしいのぼりが上がっている。恋人たちのイベントの到来ということはわかる。店の謳い文句に負けて足を向けたままではいい。ふわふわ、あまあまな雰囲気一気に精神的シヨックをうけた。だめだ、あたしの身体はこのイベント商戦に早くも脱落気味である。

恋人に気合の入りまくったチョコをあげるという行為がすでにあたしらしくなくて落ち込み気味。

思い返せば、恋人なんだよなあとか思う。

無駄につらつら考えていても、足取りは迷いが無い。通りなれた駅までの道をたどる。

宮部と恋人とは、なんだか笑える。高校時代には考えられなかったいつだって、誰にだってあんな調子で接するから友達としてはいいけどさすがに異性の対象はなりえなかったなあ、と。そこで頭に過る考えに足が止まった。

あれ？ そういえば、付き合おうとか言葉をもらったわけではない、

成行きでそんな関係になってしまったただけだ。だから、付き合い始めたと思っただけ……。

「あれ？ あれからあいつと連絡とったっけ」

思わずつぶやいてしまい、周囲の視線が痛い。いやいや、めったに独り言なんて言いませんから！ 誰に言い訳するでもないけれど思わず叫びたくなった。それこそ痛いコだし。

そこで思わず振り返る。いや、こういうときにバッテリーってのが今までのセオリーだったし。振り返って辺りを見回すけれど、どうにもこうにも。

まあ、そう何度もうまい具合に進んでいくわけないよね、と。バッグの中から携帯電話を取り出す。このバッグは会うたびに、宮部にぶつけていたなあ。あの調子でいつもこちらをからかうから、ついつい手が先にでてしまうのだ。

ささっと携帯メモリから宮部丈二の名前を呼び出す。文面を考えずに、メール作成画面までたどり着く。ここまでの動作は慣れたものだ。けれど、ここからが問題なわけだ。

さて、なんて送ろう。

ストレートにあたしたち、付き合い合ってるんだよね？ なんとと言えるわけもなく。無難に今、何してる？

と一言だけ本文に打つ。送信ボタンを押して、送信完了のメッセージが出たのを確認して、携帯を閉じた。

返事が返ってきたとして、話をどう続けていくかも問題で。高校時代にメールアドレスを交換していても、数えるほどしかメールを送ったことがなく、いわゆる事務連絡みたいなものだったと思うし。どんな内容だったか覚えていないけれど、メールの内容までおちゃらけた言葉づかいだったらどうしようか。

恋のその後2

携帯を手に持ったまま、足を進めていくと伝わる振動でメールの着信を知る。

意外と速いな、と開いて気付く。

「エラーメールって……」

思わず足を止めてしまつて呆然となる。送信先が見当たりません、と書かれたそれに思考回路が止まる。

高校時代から何年つたのだろう、いつのまにかアドレスは変わつており、メールが届かない。それならばと電話を掛ける。

何を話すかなど考えていない。繋がらないことに焦燥感を覚えて、衝動的に通話ボタンを押してしまった。

しかし、聞こえてくるのは機械の無情な声。

「現在使われておりませんだと……」

思わず独り言も出てしまうはずだ。周囲からの視線も痛い、それ以上に腹が立つてきた。

待て待て、食われたのにそのあと連絡が取れないって！

徐々に怒りが込み上げてきて、もう知ったことか！ と乱暴に携帯電話をバッグへと放り込む。完全に足が止まっていたが、大股で歩き始めたあたしを遠巻きに見つめる通行人など気にはおれない。もう何度も通り慣れた道を進む。ふと、このまま道を反れて、記憶を辿りながらやつの家へと乗り込むのも悪くはないと思った。けれど、そんな感情に振り回されるほど子どもでもなく、怒りに捕らわれながらも冷静に判断できるくらいには大人であるがゆえに、大き

なため息をついてすべての感情に折り合いをつけることでできてしまった。

これは、本格的にやつとの偶然の出会いを待つ以外なさそうである。

いつの間にか、恋人たちのイベントまで数日となっていた。

クリスマスマジックにかかってしまって、落ちてしまったあたしであるが今回のイベントにはどうやら縁がないようである。

それもそのはず。肝心のやつとの邂逅はいまだこず、といったところである。タイミングよく表れていたのも3度までらしい。顔を見ない日々が1か月も続けばあたしも冷静になる。思い返せば羞恥心に駆られるため、どうしてもあの夜のことは思い出したくない。

一方で、どうして会いに来ない！ と理不尽にも思ってしまうあたしがいる。

「こりゃ、あたしも重症だわ」

ふらふらとイベント商戦に乗っかり、チョコレートを手にとってしまっ現状に嘆きたくもなる。本日も手に取るだけ、正気に戻ってそれを棚に返す。さすがに買ってしまっまでは至らない。ここ最近で増えたため息に、幸せはマイナスになってしまっそうだ。

「あら、歌織ちゃん奇遇じゃないですか。恋人にチョコ？ いやあねえ、宮部さん照れちゃう」

そうしてタイミングよく現れたやつにハンドバッグを振り回したって罪にはならないと思う。

「いつっ」

「うっさい」

「暴力はんたい。弱り切ったおじさんにもうちよつと愛をちょうだい。愛を」

「知りません」

いつものように調子に乗った宮部の言葉に思わず涙腺が緩んだ。自分でもわからないけど、どうやら弱っていたらしい。

強がりを出してはいるものの、まともに宮部の顔が見れなくて、その場を立ち去る。

ここでそのまま帰ってしまえばまた同じことの繰り返しだとわかってはいるものの、素直になれそうにないあたしは、早や足で宮部から遠ざかることしかできなかった。

しかしまあ宮部だって、あたしを恋人と認識しているのを確認できて、よかつたんだけど。

恋のその後3

「宮部さんにチヨコをあげたいと言う女の子が多くて多くて。モテる男はつらいねえ」

一定の距離を保ったまま、住宅街を駆け抜ける。

こっちは早や足で進んでいて、息も上がりそうだというのに、絶えず言葉を発するやつの息は乱れる様子もない。

「甘いものはどーんといい」

無視ムシ。

知らぬ存ぜぬで通し切ってやる。

「いやあねえ、歌織ちゃんムシですか。そうですか。宮部さん泣いちやう。およよ」

コツコツとヒールを鳴らして進んでいたがいつの間にか足音は一つだけになっていった。

ついてくる気配さえ感じなくなってあたしは思わず振り返る。

「みやべ？」

遠く離れたところに立ち尽くすその姿を怪訝に思い、身体ごと振り返る。

「なにしてるの？」

疑問を投げかけたけれど、宮部は肩をすくめただけで返事はこない。

それどころか、そのまま踵を返してあたしへ背を向けた。

「ちよ、ちよっと待ってよ宮部ってば」

静止をかけるあたしの声をまるで聞こえないかのように、歩みを止めない。

「ねえ、聞こえてるんでしょ」

背を向け、離れていく宮部を追いかけるために来た道を戻る。けれど一向にその差が埋まらない。それどころか広がるばかりであたしは焦る。

「待って、って言ってるでしょ」

早や足どころか走らなければ追いつかない。徐々に狭まりだしたその距離、手を伸ばせば触れるほど近くなってあたしは思う。

なんで、あたしは今宮部を追いかけてるんだろう。

思ったのとあたしが手を伸ばして宮部の腕をつかんだのはほぼ同時で、その腕を引いた。

なんで、宮部は怒ってるんだろう。

「怒って、る？」

「いやあねえ、会社では仏の宮部と呼ばれて……」

「ほらやっぱり怒ってる。いつもの宮部じゃない」

調子よくぼんぼんと飛び出す言葉がいつになくキレがわるい、ような気がする。

それほど付き合いが長いわけではないけれど、なんとなくそう思った。

「歌織ちゃん、俺をなんだと思ってんの」

いつもにこにこ笑いながら調子よく話すのに、急に真面目な顔してぼつりとつぶやく。

「え?」

「とりあえず、寄っとく?」

首をかしげて見た先に、2か月ほど前イタしてしまったやつマンシヨンがある。

「狙ってる?」

「いやいや、歌織ちゃんからかいがあって宮部さん退屈しません」

「は?」

「いやまあ、とりあえず」

宮部の腕をつかんだままだった。その手を逆に捕まれて引かれる。

「連絡先はあとで」

まずはこつち、と。

お調子者から、ただの男へと変わる。

恋のその後3（後書き）

あれ？ 何が書きたいのかわからなくなってきた。
宮部くんカオス

ついでにイベントどっかいったー

2011921 誤字訂正

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9812v/>

難解恋愛方程式

2011年10月1日09時44分発行